

2020 年度春季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2020年8月22日に研究報告の場として、2020年度春季大会をオンライン（ウェブ会議システム zoom）形式で開催した。今回は、第1報告として山崎哲氏を迎え、研究報告「中国残留の記憶と継承——中国帰国者三世を中心に」をしていただいた。続けて、第

2報告として辛孟軻氏に論文集『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年）について書評していただいた。

当大会ではオンライン上であったのにもかかわらず、約30名の方々に参加していただいた。参加者の間で様々な議論が展開され、所期の目的を達成できた。

第1報告

山崎哲（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC2）「中国残留の記憶と継承——中国帰国者三世を中心に」

本報告では、中国帰国者三世が現代日本社会において可視化されにくい存在となっていること、また、一世（祖母・祖父）の持つ中国残留の記憶が継承されることの困難について検討を行った。

中国帰国者とは、第二次世界大戦末期の満洲における混乱ののち、日本へ引揚げることができず、中国に残ることになった日本人のうち、日本へ永住帰国した中国残留孤児・婦人等とその家族を指す総称である。中国帰国者三世とは、中国残留孤児・婦人等の孫である人々をいう。

一世は祖国への帰還という文脈において、1980年代以降、ひろくマスコミに取り上げられ国民の耳目を集めた。また、二世については中国から日本へ移住してのちに日本語習得の壁にぶつかったことや、いじめ問題に直面したことなどが学術研究等で知られている。だが三世について、一般に知られる、または、学術研究で見られる三世像から漏れ落ちる三世の存在を、自身も三世当事者である報告者は指摘した。

先行研究では、中国から日本へ移住し教科学習に難儀するといったような三世の姿が主に議論されてきたが、報告者の聞き取り調査においては、このようなイメージでは捉えきれない三世の存在を確認することができる。では、これら三世

の多様性はいかにして生じているのか。一世二世がいつ帰国したのか（残留孤児と残留婦人というカテゴリーによる帰国時期の幅）、一世二世が帰国/移住後どこに居住したか（中国帰国者コミュニティはあったのか否か、それに接してきたか否か）を手がかりにし、これら要素から、先行研究では掴みづらい三世のあり方を三世らの語りを用いて議論を行った。

第2 報告

辛孟軻（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）「書評——佐藤量、菅野智博、湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』」

本書は「満洲の記憶」研究会による共同研究であり、職業や社会的立場などによって異なる満洲経験を持つ引揚者に着目し、それぞれの満洲記憶の表象を解明した。特に戦後日本社会における引揚者のイメージが単純化されて語られる傾向に対する反省的なまなざしは本書の特色であると考えられる。

本書は三部から構成されている。第I部「闘う記憶」では、戦後日本社会において引揚者が展開した「恩給請願運動」という背景の下で、満鉄会（大野絢也）・満洲興農合作社同人会（湯川真樹江）・蘭星会（飯倉江里衣）が取り上げられ、それぞれ現実的な需要に応じて再構築された満洲に関する集合的記憶の表象が描かれる。

そして、一世の中国残留という記憶継承が三世当事者にとって難しくなっている現状にあると指摘された。社会・家庭からの忘却、中国帰国者というカテゴリーの今日的な有効性の低下などが要因として挙げられる。日本における満洲記憶や戦争記憶の忘却は、中国帰国者家庭においても進行していることが確認できる。



佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年4月刊行 / A5判368頁 / 本体5,000円＋税 ISBN: 978-4-497-22004-2

第Ⅱ部「葛藤する記憶」では、世代交代が留意されながら、安東会（菅野智博）・大連引揚者二世（佐藤仁史）・青少年義勇軍（大石茜）という例が取り上げられて郷愁やアイデンティティをめぐる満洲記憶の表象が議論される。第Ⅲ部「周縁の記憶」では、ジェンダーとエスニシティの視角を含め、都市の女学生（佐藤量）・満洲から引揚げた台湾人（林志宏）・中国帰国者（森巧）のようなあまり触れられていない周縁者の記憶が考察される。他に、コラムでは国境を跨いだ人々の記憶（尹国花）、満蒙開拓団農民の満洲経験（本島和人）、自分史の編纂（安岡健一）、日本人牧師の家庭史（甲賀真広）、メディア関係者の視点（安藤恭子）について言及している。

本書には、以下のような3つの意義があると考えられる。第一に、引揚者個人や集団の満洲に関する記憶及びその戦後生活を一貫して考察することで、ミクロな視角から引揚者内部における記憶の多様性を解明した。第二に、戦後日本社会における満洲記憶が構築・再構築された過程を解明し、特に「被害の語り」という一面的なナラティブを打破し、「加害者」と「被害者」という相反する身分を持つ人々の記憶のありようを明らかにした。第三に、大量の会報を掘り起こして、これまで比

較的に弱かった政治・経済・社会環境との連鎖の分析を豊富なものとした。

本書において評者が課題と捉えたのは、以下のような2点が挙げられる。第一に、第Ⅲ部を「周縁」と分類しているが、あるグループを「周縁」にあると判断する基準はどこにあるか、という点である。例えば、教育を受けた都市女性を「周縁」グループと見なすことは可能であるのか。また、引揚者を「中心」と「周縁」という視点から見れば、それぞれの満洲記憶にどのような異なる点があるのか。上記の点から、引揚者の記憶の全体像を描く上で何か注意すべき点はあるのか、という課題は引き続き存在している。第二に、玉野井麻利子（*Memory Maps: The State and Manchuria in Postwar Japan*, Honolulu: University of Hawaii Press, 2009）は、引揚列車の旅のような「memory industry」が、ノスタルジアという名義で帝国日本の過去を忘れさせるという、満洲記憶に対する改造であったと指摘した。即ち、引揚者の満洲記憶の一部は戦後日本社会によって忘却されたが、戦後の国民記憶の再建に吸収された部分もあったのである。この再建過程から見る満洲記憶のありようを研究することは可能なのであろうか、という点は今後も重要であろう。